
SellVs Atom

リヴィアイアサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S e l l V s A t o m

【NZコード】

N 8 7 3 6 M

【作者名】

リヴィア イアサン

【あらすじ】

太古では、セル族という一族と、アトム族と呼ばれる強大2族がかつての世界を支配していたとされる・・・

そして、その混合体の生き残りは何でもあり、主人公最強型のバルファンタジー。

4つの人格を持ち、3つの変異姿になることが出来るアレス。異名は炎氷の雷轟。少年の物語と共に、見えてゆく2族の過去。

プロローグ（前書き）

6歳が書いてるので、暖かい日でよろしく御願いします。

プロローグ

プロローグ

遙か太古の時代・・・

かつて、頂点に君臨しているとされている「一つの力を操る一族」があつた・・・

名は「アトム」・・・

高い知能と、強大にして迅速の魔術を操る魔性の一族だつた・・・
その特徴はネクラで、顔が青白く、残酷な一族であつた。

そして、もう一つの一族の名は「セル」

高い運動神経と、裂空を連想させる一発一発が莫大な肉弾性の一族であつた。

その特徴は熱血で、血の氣があふれる心穂やかだが荒っぽい一族だつた・・・

その一つの一族は何度も衝突を繰り返し、戦争を繰り返してきた、まさにライバルの一族だつた。

そして、その因縁の戦いに終止符が打たれる・・・

戦況は、圧倒的にセル側が押していた・・・

「おらああーー！」

セルがアトムに弾丸スマッシュを撃つ。しかしあトムは、ジエル・シールドで受け流し、セルの弾丸スマッシュは地面にあたり、土を大きく抉つて、体勢が乱れた・・・

まさに一瞬の隙だった・・・

すかさずアトムは呪縛呪文で動きを封じ、一撃必殺の究極呪文を放つべく、魔力を溜め、一気に開放した。

「ネオ・ブリザードッ！ー！」

「ぐああああっ！ー」・・・

リーダーとリーダーの戦いは、アトム側の勝利で終わり、それと同時にリーダーを失ったセル一族はジワジワ攻められ、ついには滅びてしまつた。

こうなつたら、アトム一族に敵はいなかつた・・・

原点にして頂点・・・

アトム一族は多様な一族と同盟を交わし、軍事的な拡大と共に、勢力を遠くまでぐんぐん伸ばしていった。

しかし、決定的な欠点・・・

アトム一族は男が80%で、女はほとんどいなかつた・・・

軍事的には問題なく、むしろ戦力が多く最強の一族と他族に知らしめていった・・・

が、そんな栄華を極めた一族も、子がないがために簡単に滅んでしまつた。

そして、現代・・・

少年が生まれた瞬間に、この話は再び始まつた・・・

END

プロローグ（後書き）

これからもよろしくです

Story ? (前書き)

英語は、辞書でじらべた。

Story ?

Story ?

Story where one boy disappeared

「一人の少年が消えた話」

この小さな町・・・シェルド

この町で、人体実験の末、リーダー双方の細胞と核と血・・・かつての双強血統の血を純粋に継ぐ少年が3人生み出された・・・

それは余りにも強大な存在で危険とみなした王族達は、その3人の子供を抹殺しようと7人の「大罪」を送り込んだ。

大罪は、3人中2人の子供を殺し、最後の一人を取り逃がす・・・

その子供の名は、アポロニオス・アレス。宮殿内での通称は、「氷炎の雷轟」と呼ばれている。

さあ、その少年の物語の幕は斬つて落された!!

「はあ、、、はあ、、、こいつら・・・」

森林を駆け巡る少年、目は黄色く、髪は紅と蒼が入り混じった神麗な色。

顔立ちは情けなく、今にも泣きそうな顔を浮かべている・・・

「ビームまで追いつくんだよーーー！」

シェルドから9km程度離れた森で、王族の騎士に少年は追われていた。

この森は、「神隠しの森」と呼ばれ、動物や、果実が多く実つており、収穫に帰つてこれればその人は半生生きていける位に豊かになるのだが、

無事に帰つて来れなかつた人は、もう見つかる事はない。

その森を、少年は走つていた。

騎士が、止まる。

「口からは、確か神隠しの森と呼ばれていて、俺らだつてただじや帰れないかも知れない・・・一旦引き上げるぞーーー！」

馬が勢い良く唸り、前足を高く上げて、バシッといづ撲音と同時に、砂埃を上げて宮殿に向かつて走り出した。

「はあ・・・はあ・・・やつと撒いたか・・・」

少年は、肩で息をして、ひざに手をつけて別ルートから町に帰り、と後ろを振り向いた瞬間に、「何か」にぶつかった。

「イディー…………すまねえな。」

少年はそのまま過ぎ去り、横を通りとした瞬間、何かは、眩いた。

「魔の門よ……汝之力で紅の少年を異空間へ飛ばさん！開け！新たなる世界への架け橋となれ！！ノヴァ・ゲート開門！！！」

「なんなんだ！？？」

「何か」が「何か」を唱えた瞬間、木々は揺れ、大地が唸り、雲が踊る。

閃光と共に、落ちたような感覚に見舞われ、少年は、異空間の闇へと姿を消した。

「成長を願うぞ……アレス……」

そう地面に向かつて駆き、マントのようなコートのよつた、衣を翻し、「何か」はその場を立ち去った。

その上に・・・

「こやあああ……ひやああ……」

ボゲムツ……

なにかに落ちた。痛みはない。

周りには大量のひよこやマリオが・・・ってマリオ！？？とにかく、変なおっさんも取り囲んでおり、生暖かい視線と生暖かい吐息と、生暖かい何か！？が、アレスを取り巻いた。

「次の客はこの紅き神童か・・・良く柿食つ客だといいんだがな。ガアーッハッハ！！」

「寒いですー長老ー！」

「おや、 どうかの？」

「なんなんだテメエらー！」

アレスの髪の色の赤の割合が、少し多くなっている。

「おやおや・・・すまないねえ。この世界は、剣と魔法とイロイロの世界なんじやよ。だが、この世界に来たってことは、ノヴァゲートから来た客よの？」

「じりねえよ！んなもん…！テメHいれ以上俺にまとわいつくん
じゃねえ…！焼き殺すぞ…！」

「おやおや、待ちなさい。これから適正テストがあるんだじゃよ。ま
つておれ。」

老人が、アレスにじり寄る。

「クソジジイ…近づくんじゃねえ…ぶつ殺すぞ…！」

髪の紅い割合がさりに増す。

「まつておれ、すぐ終わる。」

額に人差し指。

「トッ…！」とこう音と共に、アレスの髪の色は調和を取り戻し、
通常のつりあつた色に戻った。

赤レッド…

「こぐそよ…・・・お前は少しリラックスしておれ、なあに…お前は
何もしなくていいの」のテストは終わるんだよ。」

老人の指の力が少し強くなつたと共に、宇宙に浮かんでいるような・
・ そんな浮遊感が身体が突き抜けた。

「ふむ・・なるほど、こりやあセル族の末裔かの。いや、そんなものは2億年前に絶滅してあるか・・・しかし・・・この感触はセル族と同じじや。」

「なんなんです？そのセルゾクつていうのは・・・

「放すと永い。^{なが}早く行きなさい。」

「行くつてビニへー？？」

「下界じや。」

老人が杖をトンツと地面を叩くと、そこにアレスが一人入れるくらいの穴が発生した。

「うあああああ……落ちる落ちる落ちるひひひひ……・・・・・・・・ギヤアギヤア喚いてんじやねえ！この腰抜けが！」

髪が紅い割合が9割程度になる。

やのいる、地面まであと一〇秒も残っていた。

「うおおおおっ……炎熱浮遊……」

地面上に蜉蝣が生み出で、身体がフワッと浮いた。

「一体、この世界は……」

END

Story ? (後書き)

意味解らんけど、よろしくです。
感想でアドバイスほしいです

砂漠のあつこさんですね（前書き）

ひよこは、アレスを写す鏡です

砂漠つてありますよね

Story ?

The first assassin

（第一の刺客）

アレスが着地した場所は、見渡す限りの砂漠。

「なんなんだ……」
「……」
「ひよこの場所じゃ
ねえのか？……」
「たくアツチいな……」
「出てきて冷やしてくれよ……」
・・氷野郎。」

真っ赤な髪が渦巻きながら青くなる。

「……」
「あーあ。炎野郎め……」
「凍らせて殺してやろうつか……」
「……」

アレスは、地面に手をつけ、目を閉じる。

「……水分ねーじやん……やめだ、やめだ。」

蒼い髪の毛が渦巻きながら、赤と青で調和を保つ。

「……まつたく2人とも……自分勝手に行動するな！」

（はいはい）

(ふん。)

「あれこれでもどうやらついて……」

ペー三。

「ん？」

ペー三。

おなががモーティと、持ち上がり、首から顔をひょいり出した。

「ひよー・・・つこてきでいたのか。」

ペー三。

「つたくもおーかわいーなあ、お前へ」

ペー三。

そのひよこは、掌に乗るようなサイズで、澄んだ田の周りを不思議
そうに見渡してくる。

「どうせ仕事のこと騒ぐ?」

ペー三。

ひよこは、東の方角に力を入れた。

「そ、うか、東か。じゃあ行こうか。」

(おー! そんなひよこのいう事を聞いていいのか?)

ピーコツ!

(あ? コイツ、俺の言葉がわかるのか? 本体や、双方人格ににしか聞こえないはずだけどなあ)

ピーコツ!

(・・・偶然じゃない・・・)

このひよこの力を不思議に思いつつも、東に歩を歩んで行った。

「汝、黒竜双頭剣への入り口を開かんとするためには、これから汝を襲う敵襲を打ち碎いていかねばならん。どうだ? この話に興味はないか?」

空から声が聞こえる・・

「誰だ!」

髪が一気に赤くなる。

「火炎槍!」

ピーコツ!

右手に灼熱の炎で出来て いる槍が。

「己の内に秘めたる4つの人格と共に、野獸、神鳥・・・混沌・・・汝、この修行を受ければ強く、そして勇気が漲るであらう。」

「んなあ ことはどうでも良い・・・とつとと姿を現しやがれ・・・」

「しかたがない・・・」

風が舞う。

砂塵を巻き上げ、

天まで届き、

渦の中から一人の人間が姿を現す。

それは、魂のような、そんな朧げな姿だった。

「 我の名はアレス。 火炎の死者だ。 」

ゴオツーという音と共に、アレスの姿を象った。

同時に、アレスの髪の赤が消え、白と青だった。

「 己に勝てんのか？お前。 」

「 えつ？僕！？これどんな状況？ 」

髪が青くなる。

「私の願いが叶うな。凍らせて殺せる。」

「ゴオオ！－！」と、赤アレスは炎を身に纏つた。

「炎化粉塵！！」

青アレスの上空から、紅い粉を撒いた。

「くそつ！水分がねーと何も出来ねえ！」

青アレスは、その場を離れた。

しかし、赤アレスは不敵の笑みをうかべながら、手を一発打った。

ハン。という言と共に、青アレスの身体が真っ赤に染まつた。

ゴオオオオツ！という激しい火炎音と、青アレスの叫びが混ざつて、地獄絵図と化していた。

תְּהִלָּה

青アレスは、腕につばをつけ、そのつばを凍らせた。

その少量のつばでも、腕全体が氷に包まれ、火の焼けるような痛みを癒していく。

「無駄なあがきを！」

上空を飛び回る青アレスに火をあてようと、何発も何発も赤アレスは空に火を撃つた。

そして、空からポツ、ポツ・・と雨が降り始めた。

「よし。・・・しかし、あれだけ空を燃やしたのに、雨の量はこの程度か・・・まあいい。一気に挽回だな。」

青アレスは、雲に触った。そして、表面だけを凍らせて、地上3m付近まで持つてくると、内部を超高速で一気に冷やし、氷の塊を作つた。

そして、一気にぱら撒き、氷の礫が赤アレスを襲う。

「イディイイー！・・・って、こんな物！・・うおお！・・

赤アレス付近に火炎が渦巻く。

刹那

赤アレスの身体を、氷の柱状の棘が貫いた。

その瞬間は、青アレスは地上にいた。

「なに！・？・どうやった！・？」

「こんなのも解らないのか・・・やはりお前は、ヴァ力だな。」

「んだとーーー!??」

「・・・魂は身体を貫かれても平氣なのか?」

「そんなことは聞いてない・・・どうやつたかって聞いていいの!..」

赤アレスの身体が消え、元の魂の姿に戻った後、少女の姿になつた。

「・・・おまえ・・・本体はソレか?・・・ふん。いいだろ?、教えてやる。」

「お前は、大量に降つてきた氷の塊を、火によつて、溶かし、蒸発させた。しかし、蒸発しても水分は大気中に散布される。俺は、ソレを瞬間に集め、象り、一気に凍らせて、お前を貫いたつてわけだ。どうだ?」

「・・・くそおーーせつかくおじーちゃんにほめられると思ったのにーーー!」

「・・・おじーちゃん?」

「私も、アナタみたいに強くなりたい!一緒に旅をさせてーーー!」

「ん?まあいいけど。・・・」

青アレス(ちつ。女は嫌いなんだ・・・)

「ヤツタアあ!」

「ええ？なにその喜び方！！」

「いいじゃん」 とつとと行きやがりましょ「ひー。」

「え・・あ・・うん」

こうして、少女が仲間に加わり、赤アレスも体内に宿つて、旅をすることとなつた。

ピーッ

ひよこが、少し大きく成長していた。

End

砂漠のあつこ（後書き）

家中もあつこです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8736m/>

SellVs Atom

2010年10月10日05時35分発行